

「成人移行期の重度障害者と暮らす母親がケアと働き方を調整していくプロセス」

—母親へのインタビュー調査より—

○ 関西国際大学 春木裕美 (8571)

キーワード：障害者、母親、就労 ケアの長期化

1. 研究目的

家族にケアが必要な者が生じたとき、多くの場合、女性が担うのは現在も変わらない。家族ケアの担い手には、ケア負担に加え自身も人や社会資源に頼る必要が生じるという依存的側面があること（Fineman 2004=2009）、それまで築いたアイデンティティが脅かされること（岡本 1999）の言及がある。特に、重度重複障害児や重症心身障害児は成長しても永続的にケアを要するため母親に及ぼす影響は大きい（藤原 2006）。その中で、2012年の児童福祉法改正による放課後等デイサービス事業の創設によって、子どもの余暇支援が増え、母親のケア負担を減少させ、これまでよりも就業を促進する効果もあった。しかし、「18歳の壁」と呼ばれるように、学齢期以降は代替となるサービスが不足するため母親のケア負担は再び増大し、離職を余儀なくされるなどの就業困難が喫緊の課題となっている。

本研究の目的は、放課後等デイサービスを利用していた重度障害者と暮らす母親がケアと働き方を調整していくプロセスを明らかにすることである。そのプロセスを明らかにすることで、成人期移行支援における障害福祉サービスについて、子どもだけでなく、ケアを抱え込みやすい家族への支援の一環として、移行期においても就業を継続したい母親への支援の在り方を提案する。

2. 研究の視点および方法

本研究は、半構造化面接調査を行い、子どもの放課後等デイサービスなどの障害福祉サービスを利用して、一旦、働く暮らしを手に入れた母親が、再び就業困難に陥る働き方の変容プロセスをみていく。対象者は、成人移行期にある常時の見守りを含むケアが必要な重度障害者と暮らす母親9名とした。調査期間は2023年3月から2023年11月である。

分析方法は、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた。分析焦点者を「成人移行期の重度障害者と暮らしている働く母親」とし、分析テーマを「成人移行期の重度障害者と暮らす母親がケアと働き方を調整していくプロセス」とした。

3. 倫理的配慮

本研究は、関西国際大学研究倫理審査委員会において、研究方法及びデータの管理方法の審査を受け承認を得ており（第R4-48、2023年2月12日承認）、日本社会福祉学会研究倫理規定を遵守したものである。本発表に関連して開示すべき利益相反はない。

4. 研究結果

分析の結果、特別支援学校卒業した重度障害者と暮らす母親が、就労を継続していくために、子へのケアと働き方を調整していくプロセスが見出された。以下に、ストーリーラインを述べる。

重度障害者と暮らす母親は、子どもが特別支援学校に在学中には、朝、学校へ送り出せば、学校終了後は放課後等デイサービスを利用することで、一定の時間を確保でき、ある程度の働き方が可能であった。

しかし、卒業後には放課後等デイサービスの利用が出来なくなるため、このままの働き方をすることはできず、就労継続への不安を抱く。母親は卒業後に向けて、生活介護などの新たなサービスにつながるものの、サービス選択は、子が重度障害者であることから、希望どおりの選択ができず、制限されたものとなる。そのためサービス利用の押し広げを行いつつも、一方で母親の仕事時間は短縮されていく。

そして、卒業後、新たなスタートを切る。しかし、子が新たなサービスに馴染めない時期には、ケア役割を優先すべきか悩み、ケア役割を引き受けたり、サービスの再調整をしたりしながら、仕事の再調整も迫られる。このような、子のサービスに連動した仕事の再調整によって、母親は、暮らしも仕事も余裕失い、働き方に対する諦めを抱くようになる。それでも、母親には働く価値があるため、それを支えに働いていたいと思う。

5. 考察

結論として、母親のケア負担は、子どもの成長に従って増大していることが明らかになった。特に、特別支援学校卒業後に、生活介護通所事業所と併せて日中一時支援や移動支援等を併せて利用しているもののサービス利用のしづらさがあるため、就労だけでなく、暮らし自体にも支障をきたしていた。これらを踏まえて成人移行期の支援として、第1に、学齢期終了後の通所サービスの時間的拡充や通所サービスの終了後のサービスの構築が必要である。第2に、共に暮らす母親が就業を継続したい場合には、障害当事者と家族の双方の暮らしを視野に入れた相談支援専門員による丁寧な聞き取りと、サービスのコーディネートが必要であることを示唆した。

参考文献

- Fineman, M. A. (2004) *The Autonomy Myth: A Theory of Dependency*. New York: New Press. (=2009, 穂田信子・速水葉子訳『ケアの絆：自律神話を超えて』岩波書店.)
- 藤原里佐(2006)『重度障害児家族の生活：ケアする母親とジェンダー』明石書店.
- 岡本祐子(1999b)「ケアすることとアイデンティティの発達」岡本祐子編『女性の生涯発達とアイデンティティ：個としての発達・かかわりの中での成熟』北大路書房, 143-178.